

# 関東大震災(1)

関東大震災は未曾有の大災害であるがゆえ、多くの調査報告、研究が存在しますが、調査方法や集計時期の違いによるものと思われる異なった数値や内容が示されている事があります。

本稿に記載する数値並びに記述内容等に関しましては複数の文献等を参考にさせていただいており、本文に引用致します場合は参考文献等の数値内容等に変更を加えることなく引用させていただいておりますため差異を含んでおります。皆様を混乱させてしまうこととなるかも知れず誠に心苦しいのですが、ご理解を賜りますようお願い申し上げます。参考文献一覧は文末に記載させていただきます。

## 概要

1923年9月1日（土曜日）

本震 11時58分 M7.9      余震 12時02分 M7.3      余震 12時03分 M7.2

震源地：相模湾海溝最深部（相模トラフ）

震域：東京、神奈川、千葉、埼玉、山梨、静岡、茨城等一府六県

交通機関、通信機関、電気、ガス、水道、喪失

津波：相模湾沿岸及び房総半島に最大6～12m

土砂災害：多数

死者行方不明者数：約105,000人（うち火災による犠牲者約92,000人、約90%）

被災者数：約190万人

余震：9月2日 余震 11時46分勝浦沖 M7.6 余震 18時27分九十九里沖 M7.1

他3日余りで約900回

## 関東大震災の被害状況

合計は全壊、半壊の非焼失と焼失、流失埋没数の和

	住宅被害棟数							再掲
	全壊	非焼失	半壊	非焼失	焼失	流失埋没	合計	全半壊
神奈川県	63,577	46,621	54,035	43,047	35,412	497	125,577	117,612
東京都	24,469	11,842	29,525	17,231	176,505	2	205,580	53,994
千葉県	13,767	13,444	6,093	6,030	431	71	19,976	19,860
埼玉県	4,759	4,759	4,086	4,086	0	0	8,845	8,845
山梨県	577	577	2,225	2,225	0	0	2,802	2,802
静岡県	2,383	2,309	6,370	6,214	5	731	9,259	8,753
茨城県	141	141	342	342	0	0	483	483
長野県	13	13	75	75	0	0	88	88
栃木県	3	3	1	1	0	0	4	4
群馬県	24	24	21	21	0	0	45	45
合計	109,713	79,733	102,773	79,272	212,353	1,301	372,659	212,486

	死者行方不明者数				
	住宅全壊	火災	流失埋没	工場等	合計
神奈川県	5,795	25,201	836	1,006	32,838
東京都	3,546	66,521	6	314	70,387
千葉県	1,255	59	0	32	1,346
埼玉県	315	0	0	28	343
山梨県	20	0	0	2	22
静岡県	150	0	171	123	444
茨城県	5	0	0	0	5
長野県	0	0	0	0	0
栃木県	0	0	0	0	0
群馬県	0	0	0	0	0
合計	11,086	91,781	1,013	1,505	105,385

諸井孝文, 武村雅之「関東地震(1923年9月1日)による被害要因別死者数の推定」『日本地震工学会論文集』第4巻第4号、2004年、21-45頁、

<https://www.weblio.jp/wkja/content/>

## 内閣総理大臣急逝

1923年8月24日、加藤友三郎内閣総理大臣が急逝。翌25日加藤内閣は総辞職します。次期内閣発足まで外相が内閣総理大臣を臨時兼任して関連事務を取り扱いました。後継の首相となった山本権兵衛がまだ組閣を行っている最中に関東大震災が発生しました。

## 気象状況

1923年8月27日、沖縄石垣付近に台風が発生しています。台風は鹿児島、瀬戸内海を経て9月1日6時には石川県西方の海上に進みました。本州通過時997hPaでした。一方、長野付近でフェーン現象が発生し、寒冷前線を伴う低気圧が発生し10時頃箱根で大雨をもたらしています。そのころ台風は新潟の東に移動しています。14時頃、宇都宮を寒冷前線が通過し降雨、16～18時には東京を前線が通過して風向きが急変し、その後に火災旋風が発生しました。台風は本州を横断し三陸沖に去りました。

1日の12時～19時に中央气象台で12.3～16.1m/s、20時に麴町气象台で18.1m/sの風を観測しています。1日昼過ぎまで南風、夕方には西風、夜は北風、2日朝から再び南風と、1日から2日にかけて気象は激しく変化しています。

東京市役所編「東京震災録前輯」によれば、被災者は約340万人（1府6県の人口の29%、うち横浜市は人口の93%、東京市は人口の75%）、死者91,344人、行方不明13,275人、重傷16,514人、軽傷35,560人、全焼381,090世帯、全壊83,819世帯、半壊91,232世帯、損害額は推定約55億円余にも及んだとされています。

当時の国内総人口は約5812万人(1923年内閣統計局)、国家予算(1922年度一般会計)は約14.7億円、GDP約150億円でした。

関東大震災は、東京で大火災の被害が大きかったため、東京の地震と思ってしまうのですが、震源地の相模湾を中心に、神奈川県、千葉県、静岡県、埼玉県、山梨県等の広範囲で被害が発生しました。津波による被害が神奈川県、静岡県、千葉県で発生しています。神奈川県は震源断層の真上に位置しほぼ全域が震度6以上の地域となりました。当時人口約42万人の横浜市は、人口約220万人の東京市に比べ面積は1/2以下であるにも係わらず、出火件数では289件と東京市134件を遥かに上回っていましたが、東京（表内では「東京都」）は東京市での大火災の影響で、全半壊を免れた住宅122,511戸が焼失し火災による死者行方不明者数や住宅の焼失棟数が群を抜いて多いです。神奈川県の住宅全半壊数は東京都の2倍以上、住宅全壊数による死者行方不明者数は神奈川県の方が多くなっておりま

相模川低地、酒匂川低地、館山低地と呼ばれる沖積低地(簡単には、河川の堆積作用によって形成された平野をさします。)に相当する、神奈川県平塚、茅ヶ崎周辺の相模平野や小田原周辺の足柄平野、房総半島南部の館山から千倉に至る地域では全壊率30%以上です。神奈川県鎌倉郡、高座郡、中郡、足柄下郡、千葉県安房郡などは全壊率60%以上、特に神奈川県久良岐分大岡川村、高座郡有馬村、中郡岡崎村、神田村、相川村、足柄下郡下曾我村、千葉県安房郡北條村、館山町、館野村、那古町では全壊率80%以上に達し、ほとんど壊滅状態でした。土砂災害、津波による流失埋没での死者行方不明者数は神奈川県、静岡県、住宅被害棟数では千葉県も多数に上っています。工場等の死者行方不明者数では神奈川県、東京都、静岡県が多いです。

当時の基幹産業であった紡績工場など多くの工場は昼夜二交代制でした。芝区の電気会社工場が

倒壊し、勤務中の社員工員約 400 人が圧死、浅草では 12 階建て高層建築物が 8 階から折れました。丸の内では建設中のビルが倒壊し、作業中の労務者約 300 人が圧死しています。横浜では官庁関係建物 43 のうち 33 と外国領事館 26 はすべて焼失しました。横浜裁判所では所長以下約 100 人が圧死、ホテル等も倒壊しました。中村町にあった神奈川県揮発物貯蔵庫に飛火し火災が発生、多量の貯蔵石油等に引火して大爆発が連続発生。数千人が海や川に飛び込んで逃れようとしたましたが、水面に浮いていた重油に引火して大半の方が亡くなりました。

当時の横浜市は西区、中区、神奈川区、南区を中心にした、現在の市域の 10 分の 1 ほどの面積で、市内には運河、橋が多く、その橋が落ちたり焼けたりして逃げ道が無くなったことが被害を大きくしました。現在それらの運河の多くは埋め立てられています。川のない場所に横浜橋、駿河橋などという地名があることを考えれば当時の姿が想像できます。

市内中心部にある横浜公園に避難した人が多かったのですが、周辺がオフィス街だったため、多くの人は着の身着のままでした。家財道具を持って避難した人が多い場所では荷物に火が付き惨事になりました。横浜公園は明治 9 年に完成した西洋式公園で、その当時から緑の多い場所ですが、地震で水道管が破裂、公園が水浸しになり、樹木その他が火の粉を防ぎ火災から人々を守る役割を果たしました。これらの偶然の要素がなければ、横浜公園はさらに被害が大きかったのではないかと思います。

横浜の火災は一気に燃え広がり、一昼夜で市街地を焼き尽くし、神奈川県庁、横浜市役所もこの時に全焼、警察署その他の行政機関もほとんどが崩壊、全焼しており、行政機能は一時的に麻痺していたといえます。鉄道、通信網も寸断されていたため、震災後の数日間、横浜は社会と隔離された状況で、そのことが横浜の被災状況が正確に伝わらなかった理由のひとつと考えられます。

国有鉄道では東海道本線で被害延長約 150 km、192 カ所の駐車場のうち 178 カ所が全壊や破損あるいは焼失しました。地震発生時に区域内では 112 の列車が運転中でしたが、そのうち 23 列車が転覆若しくは脱線、11 列車が火災に遭遇しています。1922 年に竣工した神奈川県小田原市の白糸川橋梁は背後の山が崩落し押し寄せた土石流で崩壊、白糸川河口付近では白糸川を流れ下った土石流が根府川集落を埋め住民約 200 余人が犠牲になりました。海岸で遊泳していた児童数十人は本震から 5 分後に押し寄せた高さ 5~6m の津波と白糸川からの土石流に挟み撃ちになり命を落としました。北側の根府川駅に進入中の旅客汽車は駅舎、ホームもろとも土石流によって相模湾に滑落、乗客とホームに居た合計約 130 人が死亡、駅構内に残ったのは車止め 1 つだけでした。(現在、沖合の海底には当時のプラットホームが横たわっておりダイビングポイントになっています。震災遺構保存の是非がありますが、こちらの海に沈んだプラットホームは普段では目にすることはありません。訪れた人達が震災の被害を想像し震災全体をより深く知ろうとする切っ掛けとなり、やがてその知識が後世に繋がる事で防災減災、少しでも多くの命が救われるようになればと思います。)

一方、総武本線の亀戸―稲毛区間が 9 月 1 日 19 時には応急修理を完了し、被災者は続々東葛飾方面へ避難、それに応じるように沿線の町村には救護収容所が設けられました。その後、亀戸には千葉県救護出張所が設置され、東京への輸送物資の受け渡しや配給が行われました。

(つづきます)